

ウィリアム・ディーン・ハウエルズ
『アルトゥルリアからきた旅人』とマーク・トウェイン
『人間とはなにか』における人間の条件

高 吉 一 郎

はじめに

19世紀後半のアメリカ写実主義文学を代表する小説家ウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells) は、1893年から1907年にかけてアルトゥルリア物語群を雑誌に発表した。その大半が『アルトゥルリアからきた旅人』(1894)、『印象と経験』(1896)、『針の目を通るが如く』(1907)などの単行本の素材として活用される。競争ではなく協同が、自己愛ではなく隣人愛が社会の基本原理として働いている夢の国アルトゥルリアがこの間ずっと作者に取りついていたという誇張になるが、少なくとも、この理想郷が実践する他人優先の生き方は、世紀転換期の十数年、ハウエルズにとって重要な問題であり続けた。『アルトゥルリアからきた旅人』の第1話が『コスモポリタン』誌に掲載されるのが1893年。それから遡ること8年前にハウエルズはトルストイ主義に改宗している。それ以降に書かれた『サイラス・ラップムの上昇』(1885)、『アニー・キルバーン』(1888)、『危うき幸運』(1890)、『慈悲のクオリティー』(1892)などの長編小説、あるいは、1886年以降ハウエルズの担当する『ハーパーズ・マンズリー』誌の「編集主任の書斎」が進んで取りあげた社会派作品の多く、あるいは様々な一流オピニオン誌を通じて矢継ぎ早に世に問うた評論の多く——これら散らばった書き物のどれもがひとつの焦点に集中せざるをえなくなった。¹⁾ すなわち、階級両極化、急激な都市化とスラムの出現、消費社会の誕生などによって特徴付けられる世紀末アメリカの現実に目覚めたブルジョワ市民の経験する驚きと当惑である。そして、ユートピア小説『アルトゥルリアからきた旅人』は、この足掛け8年に及ぶ集中を下敷きにしたさらなる飛躍であると考えることができる。

ハウエルズの2歳年長のマーク・トウェイン (Mark Twain) にも、やはり1880年代なかば、おそらくは『ハックルベリー・フィンの冒険』(1886)の出版を境にして、重要な転機が訪れた。当時のトウェインは作家業引退も視野に入れつつ、『アーサー王宮廷のコ

¹⁾ ハウエルズは大衆雑誌、高級オピニオン誌を問わず数多くの雑誌に記事を出しており、それらの大半が選集などの形で再出版されることのないまま現在にいたる。ハウエルズの雑誌記事の出版状況を確認するにはジブリオの定番 Gibson, William M. and George Arms, *A Bibliography of William Dean Howells* (New York: New York Public Library, 1948) が至便。左傾化が著しかった時期 (ca. 1885-ca. 1900) のハウエルズについては Kazin, Alfred, *On Native Grounds: An Interpretations of Modern American Prose Literature* (New York: Reynal Hitchcock, 1942), 3-50; Kirk, Clara Marburg, *W. D. Howells, Traveller from Altruria, 1889-1894* (New Brunswick: Rutgers Univ. Press, 1962); Aaron, Daniel, *Men of Good Hope: A Story of American Progressives* (New York: Oxford Univ. Press, 1951), chapter 6: 172-207 など。Aaronの論考が特によい。

ネチカット・ヤンキー』(1889)の執筆に埋没していた。ハウエルズがのちに「民主主義のオブジェクト・レッスン²⁾と呼ぶことになるこの小説は、地元ハートフォードに本社を持つ銃器会社コルトの親方機械工ハンク・モーガンが金メッキ時代の合理主義と科学技術と冒険資本主義を携えて6世紀のイギリスにタイムスリップする物語である。そして、小説の仮想に平行するように、現実世界では、もうひとりの新米コネチカット・ヤンキー、東部の上流社会に地歩を築いたばかりの成り上がり者サミュエル・クレメンズ (Samuel Clemens) が、巨万の富を夢見て、ジェームズ・W・ページ (James W. Page) が取り組む画期的な自動植字機の開発に関与を深めていく。未公開株や株式買入れ選択権と引き替えに投資額を積み上げ、雪だるま式に膨れ上がる開発費に強いられるがまま妻オリヴィアの財産までもつき込み、ついには1893年の大不況で破産に至るこの金メッキされたコネチカット・ヤンキーは、いうなれば、筆を持ったベンチャー・キャピタリストであり、観察者の立場を忘れて戦後金メッキ時代の狂騒に連座する一参加者になったのであった。『純情洋行』(1869)以来、勧誘販売の手法を用いてベストセラーを連発してきたマーク・トウェインにおいては文学的創造とビジネスはつねに未分化であったのだが、ハウエルズが左傾化していく1880年代半ば以降、『ハックルベリー・フィン』の著者も文道商道ともにあふない動きを見せるようになる。厭世主義の暗黒に閉ざされた——とクリシェーで総括されがちな³⁾——マーク・トウェインの晩年が、ここに早くも始まっていた。

こうしてハウエルズとトウェインは、作家活動においても私生活においても、1890年から世紀転換期にかけて、ある種混乱した時期を通過することになる。本論文はこの混迷期のハウエルズとトウェインを象徴する2作品である『アルトゥルリアからきた旅人』と『人間とはなにか』をとりあげ、両作家が19世紀末に有していた人間観の比較考察を、人間の定義がなぜこの時代に主題化されなくてはならなかったのか説明してくれる個人史上、アメリカ史上の背景に適宜言及しつつ、行う。

1. 『アルトゥルリアからきた旅人』

『アルトゥルリア』は現在ではめっきり読まれることのなくなった晩期ハウエルズの作品の中でも比較的有名な部類に属する作品だ。作品の舞台になるのはニューイングランドのとある避暑地の高級リゾートホテル。後にソースタイン・ヴェブレンが分析する⁴⁾ような有閑階級が商業都市の熱い喧噪を逃れて山気に骨を休めている。と、そこへ隣人愛が実践されている理想郷国家アルトゥルリアからアメリカを訪問中の旅人アリスティーディ

²⁾ “Editor’s Study,” *Harper’s New Monthly Magazine* 80 (January 1890), 320.

³⁾ 絶望と苦悩にもまれたトウェインの晩年、という仮説の源流としては、例えば、ペインの跡を襲ったマーク・トウェイン・ペーパーズの管財人バーナード・ディヴォウトウの *Mark Twain at Work* が思い浮かぶ。永らく伝記の定番となってきた Kaplan, Justin, *Mr. Clemens and Mark Twain: A Biography* のナラティブも基本的にはこの路線を取っている。しかし、人類を痛罵し神を呪う書き物は、しばしば神が本当に残酷ならば決して許しはしなかったような恵まれた環境で書かれたのであり、もし我々がトウェインの晩年を多角的に捉えたいのなら、両者のあいだにある対照を見失ってはならないだろう。Tuckey, John S., “Introduction,” *Fables of Man* (Berkeley: Univ. of California Press, 1972), 8 を参照のこと。絶望と苦悩という鍵言葉を極力排して晩年のトウェインの創作活動を解説しようと試みた研究としては Macnaughton, William R., *Mark Twain’s Last Years As a Writer* (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1971) が貴重。

ス・ホモスがやってくる。物語はホモスの世話役となったホテル滞在中の大衆小説家トゥエルヴモウの視点より語られる。旅人ホモスは19世紀末アメリカの階級制度が理解できないでいる。駅では荷物を運ぶホテルのポーターに手を貸したり、ホテルの食堂では食器を満載した膳を運ぶウエイトレスのもとへ駆けつけて手助けを申し出たり、臭い物にされていたはずの蓋を、他意のない子供じみた好奇心から、次々に開けていく。その非常識な振る舞いに痛いところを衝かれつつける同宿の金満家たちもこれでは居心地が悪い。リゾート、レジャー、慈善事業、召使い問題、労働争議、⁵⁾ 金本位制など時事問題や上流社会の習俗の特異性に関してホモスが質問を連発し、それに対して宿泊客たちが自己弁護と自己主張のない混ぜになった答えを返していくことで物語は進展していく。しだいに、ユートピア国家アルトゥルリアの理想が光になり、社会改良を巡って百家争鳴していた当時のアメリカ文明の入り組んだ輪郭が生き活きと浮き上がってくる。

物語を締めくくるのはホモスの講演会である。近隣の農村や工業集落から駆けつけた農民、労働者、あるいはホテルの宿泊客たちを前に、ホモスは母国の歴史と現状を数十頁にわたって長講する。アルトゥルリアとは、有り体に言ってしまうと、社会主義国家の仲間だ。生産手段は国家が所有しており、職業に貴賤なく、資本家と労働者の差別は存在しない。億万長者はいないが、貧困も根絶されているから市民が妬み合うこともない。アルトゥルリアでは国民すべてが肉体労働に従事する。労働時間は一日ほんの数時間で、残りの時間は教養の開拓や娯楽に充てられる。アルトゥルリアに大都会は存在しない。各地方に自治を司る小都市がひとつずつ存在するだけで、あとは小規模の農村が小都市を放射状に取り囲む。各県庁所在地は時速150マイルで運行する幹線鉄道網が接続し、そのレールを走るのは煙害を撒き散らす蒸気機関車ではなく、地球にやさしい電気列車だ。しかし、この交通網を利用して人民が国土を飛び回るといってもないのは、競争社会の人間の心を蝕む「終わらない胸騒ぎ」(152) からだれもが解き放たれているからである。⁶⁾ 貧困や利己的野心に駆り立てられて一家が離散することもない。「いまではだれもが自分の親類縁者のうちに生を授かり、そのなかで生き、その中で死んでいきます。初期キリスト教徒の共同体の黄金期に恵みを与えた、あの美しい隣人愛、兄弟愛の精神が舞い戻ってきたのです」(152)。講演が終わるとホモスはアメリカ文明の矛盾と極端が集約されている大都会ニュー

⁴⁾ ソースタイン・ヴェブレンの *The Theory of the Leisure Class* の出版が1899年。ハウエルズは「編集主任の安楽椅子」でこの新世代経済学者を好意的に書評。『リテラチャー』誌上で「アメリカ小説にとってひとつの好機」とまで呼ぶ(“An Opportunity for American Fiction,” *Literature* April 28, May 5, 1899: 361, 385-86.)。

⁵⁾ 1886年から1894年にかけて毎年6,000件を超えるストライキが発生していた。Martin, Jay, *Harvests of Change: American Literature, 1865-1914* (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1967), 208. 有名どころでは1886年ヘイマーケット騒擾、1892年のホームステッドストライキ、1894年のプルマンストライキなど。労働者、スト破り、暴力団、当局などがいりみだれて悲劇的な事件が続発する。ヘイマーケット騒擾では状況証拠のみから七人の無政府主義者に死刑判決が下る。ハウエルズの義憤と、彼がとった具体的行動の経緯についてはLynn, Kenneth S., *William Dean Howells: An American Life* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1970), 288-292; Cady, Edwin H., *The Realist At War: The Mature Years, 1885-1920, of William Dean Howells* (Syracuse: Syracuse Univ. Press, 1958), 67-80.

⁶⁾ 『アルトゥルリアからきた旅人』からの引用にはベッドフォード版 Howells, William Dean, *A Traveler from Altruria*, ed. David W. Levy (Boston: St. Martin's Press, 1996) を用い、頁番号は括弧に収めた上で引用文直後に直接記入する。

ヨークへ移動する。そこで彼が受け取った印象は「アルトゥルリアからきた旅人の手紙」と題を変えて、引き続き『コスモポリタン』誌に掲載される。

『アルトゥルリア』は現実批判の文学であり、そこに描かれる理想像は1890年代のアメリカの世相が落とす影でもある。ホモスの講演の半分は革命が起こる以前のアルトゥルリアにまつわる。遙か太古のアルトゥルリアは19世紀末のアメリカに等しかった。初期キリスト教徒の共同体を模範にして建国されたアルトゥルリアだったが、時代が経過するにつれ、理念は色褪せ、私利私欲に駆られた商人が無規律な競争に明け暮れるようになる。しかし、資本家たちはやがてカルテルを組むほうにより多くの利益があることを知り、ついにはアルトゥルリアの全産業がほんの一握りの資本家たちによって独占される事態に至る。こうした情勢に対抗して、低賃金でこき使われる労働者たちも大同団結し、国勢はやがて総資本対総労働の内乱へ発展しようとする。だが、その寸前、総選挙による無血革命が実現する。ホモスが革命以前のアルトゥルリアについて長々とぶつのに堪えかね、聴衆の中の老農夫は「アルトゥルリアの話はまだかい？アメリカの話はもうたくさん」(143)と野次を飛ばす。アルトゥルリアの建国理念とアメリカ独立宣言、アルトゥルリアが陥る常軌を逸した競争型社会と金メッキ時代のアメリカ、投票による無血革命とハウエルズが待ち望む社会主義政権の合法的誕生——理想郷の歴史が現実国家アメリカの歴史を予表しているのは明らかなのだが、ハウエルズはホモスに「あなた方の置かれた状況を寓意したり諷刺したりしている、との非難については、ただ、その状況に関して私はそれほど十分に存じ上げているわけではないとお答えするほかありません」(144)と答えさせて白を切る。しかし、ホモスはその舌の根も渴かぬうちに——

ですが、アルトゥルリアに関してあなた方アメリカ人がとくに興味深く思われるであろうと考えられるのが、私たちの経済体制があなた方が現在日々の生活を送っている経済体制とそっくりの状態から発展してきたという事実です。これら様々な類似点において、アメリカはもうひとつのアルトゥルリアを予言しているとあなた方が感じてくれるかも、こんな希望さえ抱いていたのですが(154)。

と漏らす。金メッキ国家アメリカの醜悪はあらゆる点において革命以前のアルトゥルリアを偲ばせる。そのような国は第二のアルトゥルリアにならざるを得ない、という告白として以上の引用文は読まれるべきであろう。

物語の設定と内容のスケッチはここまでにして、以下では「人間とはなにか？」という問いが『アルトゥルリア』の主題であるという主張を、作品に散見されるヒューマン・ネイチャーという言葉の用法を検討することで、支持していきたい。まず気になるのはホモスという主人公の名前であろう。語源はギリシャ語で同一性を表す *homos* にあるのか、それともラテン語で人間を表す *homo* にあるのか、この点に関しては作者の直接の証言が残っていないだけに明快に結論を下すわけには行かない。同一性とは、まさに、アルトゥルリアとアメリカの建国理念である万人の均質平等に通じるから、ギリシャ語源説が正解のようにも思える。しかし、他方、以下で詳述するようにアルトゥルリア人とアメリカ人の意見がどこよりも鋭く対立するのが人間の本性の定義であることを知れば、ハウエルズが「人間」という奇妙な名前を主人公にあたえたと、さほど無理なく考えることができる。

また、これらふたつの語源のどちらにも語呂を合わせていると想像してみるのも、もちろん、一案である。

とにかく、いずれの案を採るにしても、主人公の名前がなんらかの思想を象徴していることは確実だろう。しかも、象徴されているのは、どちらも、人間の定義に関わる由々しき思想である。ある人間に名前を尋ねて、その相手がホモスですと返答するとき、この同語反復と呼べなくもない返答に込められた機知は別にしても、尋問者は自分の身元が解らなくなってくる。相手の正体を尋ねておきながら、あなたと同じ人間ですなどと返事され、今度は自分の正体が解らなくなってしまう。作中登場人物たちにとっても事情は変わらないようで、語り手のトゥエルヴモウは職業柄ずいぶんと気の利いた科白を言う。「ホモス氏があんまりにも主観的な存在に思えてきて、この人、自分の良心のうずきと同じで実体も輪郭もないんじゃないじゃあ、などと感じることがあるんです」(98)。トゥエルヴモウの比喩に倣えば、同じ人間という名を持つホモスは相手の姿を映し出す鏡のような怪しい人物、内面に抱えている良心の呵責が外形に受肉した実体——俗に言う、人間の鑑なのである。

「ヒューマン・ネイチャー」という単語は作品中に頻出する。回数は20をくだらないはずである。そして、頻度以上に重要なのが当時の社会状況を反映したその用例と文脈である。貧困、搾取、競争、寡占、金本位制といった経済のトピックが議論される度に、人間の性を巡るアルトゥルリア人とアメリカ人の考え方の差が強調される。典型的なのは階級意識に目覚め始めている農夫の息子ルーベン・キャンプ、宿泊客である有閑夫人メイクリー、語り手のトゥエルヴモウ、そしてホモスの四人の間に交わされる会話である。ルーベンが礼儀作法は忘れないもののかかなり興奮気味の口調で、金持ちと貧乏人は同じ国に住んでいても別々の国民だ、などとメイクリー夫人を慌てさせる——

「以前、鉄道で働いていたとき、ストライキに出たんです。家族を養うためならば、と組合員たちが自由への権利を放棄してしまうところを目の当たりにしました。みな正しいのは自分たちだということが分かっていたし、権利のために決起せざるを得なかったことも分かっていました。なのに最後はひれ伏してこちらに餌をくれる手を嘗めなくてはならなかったんです。そりゃ、私たちはみんなアメリカ人でしょう。でも、メイクリー夫人、みんなが同じ国に属しているわけではないんですよ。ブラックリストに載せられた男にどんな国があるっていうんですか？」

「ブラックリスト？」と彼女は繰り返した。「分からないんですが」

「キャンプさん、失礼ですが」と私が嘴を容れた。「しかし、ふつうブラックリストに載せられる人は、労働争議で活躍した人なんじゃないですか？」

「そうですよ」と青年は返答した。どうも、こちらの論点に通じていないようだった。

「ああ！それじゃあ、雇い主たちがその男に意趣返しをしたって責められないでしょう。それが人間の本性ヒューマン・ネイチャーというものなのだから」と私は言い返した。

するとアルトゥルリア人が「なんですって！」と叫び声をあげた。「経済的な問題に関してこちらの利益や都合に盾突いたからという理由で、その男の家族から糊口の手段を取りあげる。アメリカではこれが人間の本性ヒューマン・ネイチャーとしてまかり通っているなんて！」(104-5)

言うまでもなく「ヒューマン・ネイチャー」とは概念的矛盾を孕んだ表現である。アートとネイチャーというペアになった区分で世界を眺めれば、そこにある大半の事象はこれら見出しのどちらかに分類されてくる。森は自然であるが、家は人工物、という塩梅で。しかし、人間だけアートにもネイチャーにもすっきり分類することができないのは、それが自然と人工をつなぐ回路だからだ。極端な観念論、極端な唯物論を奉じないのなら、人間とはアートにもネイチャーにも片足をつっこんだ存在であると仮定して満足するしかない。ヒューマン・ネイチャーという撞着語法とも呼べない言葉は人間が自然の一部であると同時に外部でもあるという常識を認めた上で、あらためて、人間と自然のつながり方を思考してみようするとき生まれてくるのである。

上に引用した会話文では、このヒューマン・ネイチャーという概念、つまり、人間が自然につながっているその根っこの部分の特質について意見が真っ向から対立している。人間の本性は飽くなき私利私欲の追求にある、メイクリー夫人と語り手トゥエルヴモウはこう意識している。あちらこちらの労働争議で悶着を起こしてまわる札付きの活動家を資本家たちが煙たがる、これはヒューマン・ネイチャーを考慮すれば、即ち人情に照らし合わせれば、納得のいく行動だとトゥエルヴモウは説明する。人間は生まれつきビジネスマンなのであり、人工の規制を緩和していけば、自然と我利我利亡者になる。これが彼らの自然な人間像である。それに対して、ホモスは人間の本性が競争というビジネスの原理を超えたところにあると信じている。他利を我利に優先するのが人間の自然な本能であると信じている。たとえ私利の追求の邪魔になると判っていても、もし札付きの活動家が職にあぶれて困っているなら、その家族が路頭に迷って飢えと寒さに苦しんでいるのなら、糊口の手だてを恵んでやる、これこそ人情ではないかとホモスは返答するのである。人間は放っておかれると競争するのだろうか、それとも協同するのだろうか？邪魔し合うのだろうか、助け合うのだろうか？性悪説と性善説の分かれ目である。ヒューマン・ネイチャーの実体に関して両陣営はおよそ対角線上に構えており、妥協点はなかなか見えてこないだろう。利己心、利他心、ビジネス、本能、など重要なキーワードが揃ったところで、これらもろもろの概念と国家アメリカの関係がよく解る箇所を引用してみたい。メイクリー夫人はアルトゥルリアの人間観に対して次のように、夫の言葉をもって、反応する。

人は他人のために生きている、自分だけで生きている人などいない、という考え方ですが。うちの夫はそんなの単なるたわごとと言っていましたよ。過去にも未来にも、そんな状況は決してあり得ないだろうって。そんなことをしたら人間の本性に逆らうことになるし、人々から起業や努力や進歩に向けたあらゆる動機、インセンティブを取りあげることになるって言ってました。ほかにも色々言っていましたが、特に、これは完全に反アメリカ的な態度だと言っていましたね (98)。

引用文に従えば、メイクリー夫妻の頭のなかでは人間の本性、利己心、ビジネス、アメリカがすべて等号で数珠繋ぎになっていると解釈するほかない。ずいぶん飛躍の大きい逆説的な等式であるが、欠落した論理をあいだに補填しなくても、意外にすんなりと受け入れることができるところが興味深い。利己的なアメリカ人、自由競争の国アメリカなどは日本人がアメリカに対して抱いているドクサの典型である。しかし、ここで心に留めておき

たいのはエゴ、ビジネス、アメリカの三者がヒューマン・ネイチャーをきっかけにして癒着している事実だ。人間の本质がエゴの満足の飽くなき追求にあるのなら——伝統、家柄、階級、官僚制度、政府の市場介入など、ヨーロッパ起源の人工物に煩わされることなく個人が本能の満開を追求できる新天地、それがアメリカなら——ビジネスの倫理がアメリカの倫理であってなにが悪いのだ？メイク・マネーへの衝動が人間の性だとすると、弱者に対するいたわりなどという人工制度は悪貨をもって良貨を駆逐するのと選ぶところない、それこそ、神聖な競技場アメリカに対する冒涇である。病氣や怪我がもとで失業した労働者が、狂人や精神薄弱患者ともども救貧院の世話にならなくてはならない非情な現実に牧師がおずおずと同情を表明すると、宿泊客のひとり政治経済学の大学教授は「独立の気概を促進する唯一の方法ですから。もちろん暗い側面もありますが、仕方ありません。それ以外のやり方だとセンチメンタルになってしまうし、ビジネスにそぐいませんし、そもそも、反アメリカ的ですから」(115)とまたも反アメリカなる言葉を用いる。アルトゥルリア人が人間の本性に関して得た知見はしかし、この思想に真っ向から対立する。今度はホモスによるヒューマン・ネイチャーの定義を引用してみたい。

怠けたり、仮病を使ったり、無駄に時間を過ごしたり。このような傾向に対して昔は「それが人間の本性だから」と言われていましたが、私たち〔アルトゥルリア国民〕はそんなものは人間の本性でもなんでもないということを見いだしました。共通の欠乏を満たすために全員が手分けして仕事にあたるのであれば、みな進んで、喜んで、熱心に働く。これこそ人間の本性だと発見したのです。このようにして、私たちは、吝嗇や出し惜しみもまた人間の本性ではない、それどころか、欠乏への怖れ、あるいは、欠乏の幻影さえ取り除かれれば、人間の本性というものは気前よくあたえ、助けるものなのだということを見ました。私たちもかつては「人間は自分の利益のためなら嘘をついたりごまかしをしたりするものだ。それが人間の本性なのだから」と言っていました。しかし、もはやそんなものは私たちにとっては人間の本性ではありません。なぜなら、追求すべき利益などだれも持っていないからでしょう。追求するのは他人の利益ですし、そのあいだ自分の利益の面倒は他人が見てくれるのです。個人が私的善と共同体の善を分離して考えることなどもう完全に不可能になりました。すべての人間が幸せで繁栄していればこそ、個人もまたそうあることができるのです。ですから、だれかを出し抜こうとしたり、その裏をかこうと待ち伏せしたりするのは私たちにとっては人間の本性ではないのです(156)。

ホモスに拠れば人間とは私益そっちのけで他人に奉仕する、いわば滅私奉公の存在である。私益と公益は渾然一体で、むりやり分離すると意味を失う。他人が幸せになって初めて自分も幸せになれる、そういう他者優先の生き方こそアルトゥルリアにおいては最も自然な生き方なのだホモスは主張する。ヒューマン・ネイチャーの定義を巡るアメリカ対アルトゥルリアの議論は完全に平行線上を辿っている。エゴティズム国家アメリカの人間観が真なのか、アルトゥルリアの人間観が真なのか、テキストは露骨な回答を与えはしない。しかし、伝記的事実を総合するまでもなく、ハウエルズがホモスの側に身を置いていた

と願っていたことだけは確かだろう。ヒューマン・ネイチャーという概念の定義は自己愛と他者愛のどちらにも転びえる、だから一見したところ自己愛説を裏付けているようにも見える現代アメリカの情勢も決して人間本性に関する論駁不可能な証明として受け取られるべきではない、というハウエルズのリベラルで未来的な人間観をホモスは代弁しているのである。

2. 『人間とはなにか』

『人間とはなにか』(1906)は読んで字のごとく人間の定義という『アルトゥルリア』でハウエルズが取り組んだ問題をテーマにして書かれた哲学的な小冊子であるが、ハウエルズの意見をホモスが代弁したように、トウェインの意見を老人が代弁するという点で、ふたつの作品は同一の基本構造を共有しているとも言える。『アルトゥルリア』が理想郷小説であったのに対して、プラトンのダイアローグを擬したこの哲学書は老人と青年の対話という体裁をとっているのだが、その背後には類似の構造が働いているのである。『人間とはなにか』と同じく人間のエゴティズムの暴露を主題にしている『ヤング・サタン』の年代記(1897-1900)を例に取ると、この同一の基本構造がもっとはっきりと表れてくる。18世紀オーストリアの農村に舞台を借りたこの未完の草稿では、少年の姿をとった悪魔が主人公の前に登場して、人間という種の強欲さと残酷さを事細かに例証していく。その役回りはどこからともなくアメリカにやってきて人間の本性の善良を無邪気に説くホモスのそれと正反対だが、正反対なのはただホモスと悪魔のそれぞれが主張する人間の定義の内容であって、作中登場人物としては随分と似た機能を果たしている。ホモスも悪魔も、作者の意見を代弁するダミーであり、表舞台に顔を出したくないという作者の意向もあるから、日常の共同体から遠く離れた異界よりやって来て現世に一時滞在するという手続きが踏まれることになる。天国から俗世に降り立ったホモスも、地獄より現世に這い出した「ヤング・サタン」も、アメリカ中流階級の価値観の外部に立っているからこそ、耳が痛くなるような真実をだれ憚ることなく公言できるのだろう。特に90年代以降のトウェインには、「ハドリバークを腐敗させた男」(1900)や「手前味噌」(1901)に典型的のように、白痴や黒人奴隷などのアウトサイダーを隠れ蓑に自身の陰鬱な人間観を公表するところがままあった。「犬の手紙」(1989?)で犬仲間に人間の不徳を物語するニューファウンドランド犬のように、語り手が人間圏の外からやってくることさえあった。

『人間とはなにか』で老人が表明する人間観は確かに陰鬱で、読む者の気を滅入らせるかもしれない。しかしその思想の中になにか新機軸があるわけではない。定命論や人間機械論など、トウェイン以前に多くの哲学者がずっと厳密に考察してきたテーマばかりである。まして、クレイン、ノリス、ドライサー、ウォートンの時代に旧世代の作家がことさら人間の自由意思を否定してみせても後の祭りであって、創作活力の不経済でしかない。匿名出版された折りに現れたいくつかの書評、クレメンズの死後に著者の名前を付して再版された折りに現れたいくつかの書評、そのどれもがこの本を否定的に取りあげるのも、この新味のなさが原因だった。⁷⁾

⁷⁾ Baender, Paul, "Introduction," to Twain, Mark, *What Is Man? And Other Philosophical Writings* (Berkeley: Univ. of California Press, 1973), 16-20.

人間の本性は遺伝と環境によって決定されている。人間は外部の影響をただひたすら処理する少々複雑な機械にすぎず、機械なのだから自発性も主体性も持ち得ない。『人間とはなにか』で老人が説明する人間観は当時流行だった自然主義のそれである。ページの自動植字機は思考力をも兼ね備えているのでは、とまで一時は考えたクレメンズが今度は人間を機械に喩える。これにはどこか不思議な必然性を感じる。純情な青年に厭世的人間観を説く老人によると、人間とは機械であるから、どのような善行を行おうが人間にその手柄を請求する権利がないのは、機械の場合と選ぶところがない。ある男が弱者に施しを行ったり、女子供のために自己犠牲を払ったりしたとしても、それは男が寛大であったからでも勇敢であったからでもない。男のとった行動は外部環境が及ぼすトレーニング効果と生得の性向のふたつの必然的帰結にすぎないとされる。また、老人によれば、人間の思考は真にオリジナルなアイデアを創造することができない。どれほど画期的で斬新に見える発想も、外部から与えられた情報の受け売りに過ぎない。思考と呼ばれているプロセスでさえ人間の特権ではないとされる。人間はただ、「外界から受け取った印象を自動的かつ機械的に組み立て、それに基づいて推論を行っている」(190) だけなのだ。⁸⁾

『人間とはなにか』のふたつめの論点は、人間の本性が自己利益の飽くなき追求にあるという仮説である。人間のあらゆる行動は、自己の快樂、つまり心の平安の獲得を動機としている、そんな快感原則とも涅槃原則とも呼べるドクトリンだ。「ゆりかごから墓場まで、自分の心の平安を確保すること、精神的な安楽を得ること、これを第一目標としないような行動を人間が取ることは決してない」(136)——このことを心に留めておくと老人は青年に忠告する。自己肯定を求める利己的動機こそが人間のあらゆる行動パターンを決定する唯一の基準であるから、「自己犠牲という言葉は指示する実在物をもたない」(147)。人間が己の正体の醜さを隠したいばかりに辞書に密輸入した概念である。博愛、慈悲、同情などのケースにおいても事情は変わらない。どれも偽装をほどこされた私欲にすぎない。通行人が路傍の浮浪者に小銭を恵むときも、億万長者が慈善事業に私財を提供するときも、困窮する他人の扶助とは己の良心のやましさを鎮め、周囲の社会から賞賛を受け取るための手段にすぎない。払うとき、贈るとき、あたえるとき、人はいつでも見返りを計算している。ギブするとはあとでテイクすることを目的にした算盤づくの行為である。自己犠牲と呼び慣わされている非経済的行為は、実は少ない元本で高利回りを呼び寄せる「投資」(136, 150) であり「投機」(150) であり「博打」(150) なのである。その意地汚い打算ぶりには「ウォール街も赤面する」(136) ほど。人道すなわち商道と考えるエゴリアの論理がここに見え隠れする。

当然、人間がもし本当に機械なら自己利益を追求することはないだろうから、この第二の論点はさきに素描した人間機械論と矛盾する。本作品が数多く有する非整合性のひとつだ。したがって論点が移るとともに比喻も移らざるをえない。人間が機械の次に喩えられるのは動物である。ヒトの王国と獣の王国のあいだに有意味な国境は認めない、これが老人の基本の態度だ。「下院議員に教え込めることならあらかたなんであれ蚤にも教え込む

⁸⁾ 『人間とはなにか』からの引用はバークレー版 Twain, Mark, *What Is Man? And Other Philosophical Writings*, ed. Paul Baender (Berkeley: Univ. of California Press, 1973) を用い、頁番号は括弧に収めた上で引用文直後に直接記入する。

ことができる」(193)という政治家批判はまだしも、人間界の最上等種のエジソンやシェークスピアと動物界最下等の鼠が同列に論じられるにいたって青年はさすがに耳を疑い「なんですって？ヒトと獣を分ける国境線を廃絶しようとしてるんですよ、あなたは」と尋ねる。それでも、老人は「お言葉を返すようだが、端から実在しないものなど廃絶しようがありませんよ」と顔色を変える様子もない(193)。

人間を獣以上に獣性を持った存在と見なすこの老人の人間観を、世紀転換期のマーク・トウェインは、さまざまな機会に、さまざまな代弁者を通じて表現した。人は獣以下という主張が最もはっきりと表明されているのは、たとえば1896年執筆の無題の草稿「アニマル・ワールドにおける人間の地位」である。

下等動物(と言いつつ習わされているところのもの)の特徴と性向を科学的に研究してきた。それらを人間の特徴と性向に照らし合わせてきた。そして、その研究の結果に私は心の底から恥じ入った。というのも、研究結果に従えば、「下等動物からの人間の進化」というダーウィン理論への忠誠を断念しなくてはならないからだ。この理論にはより新しく、より真理に近いもうひとつの理論に席を譲ってもらわなくてはならないから、この新しいほうの理論を「高等動物からの人間の退化」と名づけることにしよう。⁹⁾

実名まで出ていることから明らかなように、チャールズ・ダーウィンの学説はマーク・トウェインに多大の影響をあたえていた。人類の祖先が猿であったという見解がここまで普及したからにはこれまで人類の父の座にあった有名人アダムもそのうち人々の記憶から消え去ってしまうに違いない。そのようなことになる前にアダムの記念碑を建てて、その名を不滅のものにしておこうというジョークがもとになったエッセー「アダムの記念像」(1906)や、この奇想が利用された未完の草稿「遺棄船の避難場所」(1905-1906)などがダーウィんに直接言及した作品として真っ先に思い出される。

The Descent of Man (1871) が『種の起源』(1859)で提示された自然淘汰の法則を人間種にまで適用した書物であることは、もちろんトウェインも知っていた。進化論の衝撃をなんらかの形で体感しなかった世紀末アメリカの芸術家、知識人、宗教家など皆無に近かったのだから、その学説の提唱者の名前や代表作の書名がトウェインのさまざまな書き物に登場するのも当然である。¹⁰⁾ただ、あまり当然ではないのは、引用した文章においてトウェインが「系統」という言葉をわざと下降と解釈している点である。この意図的誤読はトウェインにとっては進化論すなわち退化論であったことを示す。幾多の生存競争を勝ち抜き、高度な物質文明を築き上げた霊長類ヒト目ヒト科は、生物界の最高等の栄誉に浴してしかるべきである。しかし、道徳精神のレベルにおいては、ヒトは動物より下等の生き物であるというのがトウェインの考えであった。

動物と人間の地位逆転というこのような退化史観は、進化論と同じくらいながい伝統を持つ思想で、そこにはなんら——書評の言葉を繰り返せば——新味がない。野獣の無垢を賛美する、いわば原始主義とも呼べる思潮は、西欧の文化史を貫流している。人事交際に

⁹⁾ Twain, *What Is Man? And Other Philosophical Writings*, 81.

疲れた厭世主義者が赴くのは極まって野であり森であり非文明のアニマル・ワールドであった。しかし、トウェインの退化史観においては、人間が貶められるのに逆比例して動物の地位が向上していく、あるいは人間界の見通しが暗くなるのに逆比例してアニマル・ワールドの理想が輝きを増すという救いがないのである。『ヘンリー・アダムズの教育』の第15章「ダーウィニズム」でラ・フォンテーヌを引用するヘンリー・アダムズから再引用すれば――

とっくりかんがえてみた結果、畢竟こたえはこうなりました。

どちらも極悪人なれど

人であるなら狼でいたい。¹⁰⁾

トウェインのアニマリズムは「人であるなら狼でいたい」という程度の消極的選択もしくは次善の策であって、その裏から動物の最善に憧れるかのごとき希望の推進力が出てくることなどない。人間の否定に前後して動物の肯定が現れるわけではないのだ。

人間はとりわけ道徳心の分野で動物に劣るというアダムズの思いは、そのままトウェインのそれでもある。『人間とはなにか』の老人は動物の知力がいかに人間のそれに匹敵するか、蟻から牛までいろいろな動物の行動を観察しながら証明しようとする。人間が動物に優越する理由として挙げられる理性的な判断能力などどんなに下等と思われる動物でも持っているものであり、人間の特権でもなんでもないから、知性の高低では人間界と動物界とのあいだにくっきりした境界線を引くことはできない、と唱えるのである。しかし、こと道徳力が比較の基準となると、『ヤング・サタンの年代記』のサタンと同様、老人は人間の劣位を断言する。道徳のセンスこそ文明人と野蛮人、人間と獣を分別する基準であるとして一般に考えられがちだが、道徳のセンスが存在しないはずのアニマル・ワールドには倫理にもとるような行為が存在していない、というのが人間劣位説の根拠である。肌の色が違う同胞を奴隷にしたり、宗旨が違う人間を拷問にかけたり、土地の所有権をめぐる戦争をしたり、金をめぐる骨肉の争いを繰り広げたり。残虐行為と悪徳の現象はただ人間界にのみ限定される。道徳のセンスとは善と悪を区別する能力のことだが、この能力を動物界で唯一身に着けた種族であるヒトはこの能力を悪の選択にしか用いない、と老人の人

¹⁰⁾ ダーウィニズムが19世紀後半のアメリカに及ぼした影響全般については Degler, Carl N., *In Search of Human Nature: The Decline and Revival of Darwinism in American Social Thought* (New York: Oxford Univ. Press, 1991); Hofstadter, Richard, *Social Darwinism in American Thought* (Boston: Beacon Press, 1955); Curti, Merle, *Human Nature in American Thought: A History* (Madison: Univ. of Wisconsin Press, 1980), chapter 9. などを参照。クレメンズが『人間の系統』を読んだのは『人間とはなにか』執筆に遡ること30年ほど前、1871年から1872年にかけての冬だった。『人間とはなにか』に見られる19世紀の諸科学からの影響の痕跡については Jones, Alexander, "Mark Twain and the Determinism of *What Is Man?*," *American Literature* 29 (1957), 1-17; Cummings, Sherwood, "What Is Man?: The Scientific Sources," in *Essays on Determinism in American Literature*, ed. Sydney J. Krause (Kent, Ohio: Kent State Univ. Press, 1964), 108-16; Gribben, Alan, "Mark Twain, Phrenology and the Temperaments: A Study of the Pseudo-Scientific Influence," *American Quarterly* 24 (1972), 45-68 などを参照のこと。

¹¹⁾ Adams, Henry, *The Education of Henry Adams* (Boston: Houghton Mifflin, 1973), 230.

間観は徹底している。

1905年頃に書かれたと思われる未発表の草稿のなかに「アニマル法廷にて」という興味深い断片がある。『人間とはなにか』の対話に挿入される予定であったのかどうかは明らかになっていない。この法廷には善行を成した者、法を破った者が次々に出廷する。まず戦争に駆り出されておきながら敵前逃亡した兎が怯懦の罪で告訴される。判決は首から「臆病者」と書かれた札をぶら下げての絞首刑。次に戦争中大いに武名を挙げたライオンが出廷し、その勇敢さに一国一城が賜与される。狐の罪状は窃盗、判決は終身刑。一方、目の前にいた鶏を捕って食ったりしなかった馬は、その美德が世に喧伝される。狼の罪状は殺し、判決は死刑。一方、殺害への誘惑に決して屈することのなかった羊は、その美德が讃えられる。

この寓話から汲み取るべき教訓は明白だろう。兎は臆病であり、草食の馬は家禽を食しない。狼は殺生が本業であり、羊は温厚をその本性とする。6匹の獣たちはみな己の獣道に従っただけなのに、怯懦、勇氣、害獣、殺生など人間が考案した理念で裁かれると、その審判は恣意的で不公正なものにならざるをえないのだ。

最後に機械が出廷する。ぼんこつで不具合が多くて周囲に迷惑を撒き散らす、これが罪状である。容疑に対して機械は「私は機械ですよ。設計されたとおりに動くだけの奴隷ですよ。どんな状況であっても自分の型に従わなくてはならないのです。自分だけではなにもできません。外部の影響力のおかげで初めて自分は稼働することができるのです。自分の力だけでは始動もままなりません」と抗論する。¹²⁾すると法廷は意外にも無罪放免を言い渡すのだが、その理由とは――

訴えはもっとも。あなたはなんとも惨めな存在で、長所もあれば短所もある。しかし、一方から生じた行為に褒美をあたえ、もう一方から生じた行為に処罰をあたえるのは不正であり不公平になろう。とはいっても、もちろん、これはあなたが機械だからの話だが。¹³⁾

すでに『人間とはなにか』を読んでいる私たちにはこの機械が人間であるということが明白になっている。そして、人間が獣以下の存在――機械――のレベルまで貶められる過程で失ったもの、それは自由意思であり責任であった。人間の尊厳と引き替えに無罪放免を引き出したのだった。ヒトとはトウェインの言うところの「メイク」、すなわち生得の本性の奴隷であり、なおかつ、その奴隷は「外部の影響」というもうひとりの主人にも仕えている。ならば、その非行や善行を持ち出して奴隷を褒めたり責めたりする道理などまったくないのである。狼や兎にまで法的責任能力を認めたアニマル法廷がヒトという特例を法の圏外におく事由である。

このような捨て身の法廷戦術の裏にはマーク・トウェインの私的動機が見え隠れする。ハウエルズの良心がホモスという優しく温かい形態をとったのとは対称的に、トウェインの良心は「当節のコネチカットに蔓延する犯罪事件の背景」に登場したような醜いせむし

¹²⁾ Twain, *What Is Man? And Other Philosophical Writings*, 123.

¹³⁾ Twain, *op. cit.*, 123.

男だった。「当節のコネチカット」では語り手が良心の化身であるこびとを殺害し、それ以降、殺人、放火、略奪の限りを尽くすのだが、作者のほうは最後まで良心を殺すことができなかったのだろう。殺せないにも関わらず、殺意だけはだれよりも鋭く意識していたから、その結果生まれた『人間とはなにか』やそのほかの膨大な量の未完原稿は——ディヴォウトウがいみじくも指摘しているとおりに——どれも「私を責めないでくれ！」という犯してもいない罪に対する恩赦要求となったのではないか。¹⁴⁾

おわりに

それぞれオハイオとミズーリという西部の辺境に生を受け、少年植字工として読み書きよりも早く植字を覚え、一方はヴェニスのアメリカ領事として、もう他方はミズーリの不正規南軍兵として南北戦争を通過し、40代を前にして文芸首都ボストンとヤンキー商業都市ハートフォードのエスタブリッシュメント層に食い込み、晩年にはそれぞれアメリカ文学の長老、「アメリカ文学のリンカーン」と称されるまでに出世階段を上りきったハウエルズとトウェインは、国家アメリカ一般の文化的経済的ドリームを体現したと言っている。ともに写実主義を立ち上げて19世紀後半の文学潮流を決定し、金儲けに励み、家族的価値観を絶対視し、アメリカ建国の理念をだれよりも美化し、金メッキ時代の拝金主義や世紀末の帝国主義にだれよりもうるさく嘯みついたふたりの同時代作家。¹⁵⁾ 彼らが老境に入って到達した人間観は、以上に考察してきたとおりに正反対のものとなった。皮肉にも、ロマンチックで典型的な人間表象を嫌ってより日常で普通の人間の現実を描いたとされるふたりの写実主義者が、晩年にいたって、かくも極端に歪曲された人間観を表明することになったのである。

トウェインは人間のあらゆる行動はその究極の動機として自己愛に基づいていると説き、通常「他者のため」と称して行われる行為の裏にも実はエゴティズムが働いているとする。人間は結局は自己の欲望の充足をその究極目的にして生きているのだから、他者に恩恵を施す唯一の仕方とは、結果的に周囲の人間にも恩恵が波及することを願いつつ、ひたすら

¹⁴⁾ De Voto, Bernard, *Mark Twain at Work* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1942), 116. ほかに、トウェインが決定論に傾いたのは罪悪感から解放されるためだ、という仮説としては Wagenknecht, Edward, *Mark Twain: The Man and His Work* (New Haven: Yale Univ. Press, 1935), 216; Doren, Carl Van, *The American Novel, 1789-1939* (New York: The Macmillan Company, 1940), 157 など。

¹⁵⁾ マーク・トウェインとハウエルズの反帝国主義については Gibson, William M., "Mark Twain and Howells, Anti-Imperialists," *New England Quarterly* XX (December 1947), 435-470 が基本。ほかには Gibson, William M., *Theodore Roosevelt Among the Humorists: W. D. Howells, Mark Twain, and Mr. Dooley* (Knoxville: Univ. of Tennessee Press, 1960); Harrington, Fred, "The Anti-imperialists Movement in the United States," *Mississippi Valley Historical Review* 22 (September 1935), 211-30; Harrington, Fred, "Literary Aspects of Anti-imperialism, 1898-1902," *New England Quarterly* 10 (December 1937), 650-67. トウェインの反帝国主義については Budd, Louis J., *Mark Twain: Social Philosopher* (Bloomington: Indiana Univ. Press, 1962), chapter 8, 168-190; Wuliger, Robert, "Mark Twain on King Leopold's Soliloquy," *American Literature* 25 (March 1953), 234-37; Hawkins, Hunt, "Mark Twain's Involvement with the Congo Reform Movement," *New England Quarterly* 51 (June 1978), 147-75; Giddings, Robert, "Mark Twain and King Leopold of the Belgians," in *Mark Twain: A Sumptuous Variety*, ed. Robert Giddings (Totowa, N.J.: Barnes and Noble, 1955); Macnaughton, William R., *Mark Twain's Last Years As a Writer* (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1971), chapter 7などを参照されたい。

自己の欲望の充足に邁進することである。齢七十に近い『ハックルベリー・フィン』の著者が十数年に渡って構想を温めてきた人類呪詛の書の結論は、自由競争、極端なエマソンの個人主義、エコノミック・アニマルとしての人間像、結果としての不平等の容認といった、アメリカ型資本主義の立脚する基本イデオロギーにみごとにはまった。一方、ハウエルズはアルトゥリズムが社会の基本原理になっている「アルトゥリア」なる架空の国を創造し、聖人ホモスの目を通じて自己中心主義に支配された企業国家アメリカの醜さを浮かび上がらせる。

トウェインとハウエルズの間観はまるで正反対なのだが、どちらも人間や社会の現実の姿を単純化し、抽象化し、類型化しているという点で嘘であり、イメージであり、夢である。往年の現実主義者ふたりは、暗い夢であれ、明るい夢であれ、なんらかの夢を見ずにはいられなくなった。どちらの作家も現実の報道から非現実の予言へ移行せざるをえなくなった。開き直りと批判という違いがあるにしても、両者に共通するのは資本主義を人工的な社会制度（都市政策、福祉、税制、組合運動、婦人参政権運動などを通じて改善可能なある社会的構築物）としてではなく、人間の本性の延長として理解している点である。言い換えれば、経済論が人間論と重なっているという点である。経済が人間活動から完全に離陸してしまい、自律の活動圏を構成している現代、このような思想は人間理解としても経済理解としても不正確きわまりないものに見えてしまう。

しかし、また、夢の不正確さを解説し、意識の正確さを修復することも可能であらねばならない。トウェインが人間を私利私欲に駆られた動物以下の獣として描くのは、彼がその反対こそが実状であることを認識していたためだった、というのははたしてそれほどありえない筋書きだろうか？あるいは、腹話術師としてのハウエルズ以上に、自分のダミーが語るアルトゥリア事情の嘘を認識していた人物はいなかったと考える方が、むしろより合理的ではないか？世紀転換期のアメリカの有様を見れば、人類みな兄弟などという初期キリスト教徒の理想が理想以下の虚妄であることくらいハウエルズには明白だった。いや、周囲の社会を見る必要さえなかったのだろう。己のやましい良心をのぞき込めば、彼自身がホモスになりえないことは自明だったはずである。もちろん、人間の本性が他者愛にあるべきだとハウエルズが信じていた、願っていたことは確かだが、現実問題として、人間の本性が他者愛に立脚しているとは決して考えてはいなかったはずである。まして、社会主義革命の到来をハウエルズが心の底から希求していたかということ、疑問を覚えずにはいられない。1887年4月17日、父親に宛てられた手紙には「マーク・トウェインに会いにハートフォードに立ち寄ってきました。……彼と彼の妻とエリノアと私、4人に共通した意見とは、つまり、私たちは理論的には社会主義者であり、実践的には貴族だということです。ただ、理論上正しい立場に身を置きつつ、実践上、己に恥じ入るといえるのは、それだけでも慰めになります」とある。¹⁶⁾ お茶の間社会主義者ハウエルズのリベラリズムと未来志向が罪悪感の裏返しであることは明らかだろう。彼は爆弾を片手に労働争議の渦中へ身を投じたわけではなかった。確実に売れる作品を量産し、老巧の寝技で出版社から高印税を引き出し、快適なライフスタイルの維持に腐心する——理論はともあれこれが彼の実践であった。彼が社会主義の立場をとるのが理論のレベルであるのに等しく、アル

¹⁶⁾ To William Cooper Howells, April 17, 1887. Quoted in *The Realist at War*, 147.

トゥルリア物語群の作者がホモスを通じて腹話術する性善説も理論上の正解であるに過ぎない。¹⁷⁾ それはいうなれば実現することのなかった良心の夢であり、この夢を表現する媒体としてハウエルズはユートピア小説という道具立てを選択した。¹⁸⁾

自己の快樂と利益の最大化を目指す欲望マシーン。このような人間像は世紀末アメリカ社会にはびこった進化論と功利主義の捏造による。翻って、隣人愛に基づいたコミュニオン、すなわち架空国家アルトゥルリア。これもまた理念であり願望であり虚像である。人間は機械でもなければ聖人でもない。その中間に生きているはずである。現実の社会は弱肉強食のドラマが繰り広げられるジャングルでもないし、聖人たちが平和に共同生活を送るコミュニオンでもない。その中間である。この中間状態が『ハックルベリー・フィン』や『サイラス・ラップム』の主題であった。トゥウェインとハウエルズは、その写実主義時代の代表作において、過激なロマン主義を排し、人間であることのあいまいさを表象しようとしたのだった。彼らが老境に至って表明するようになった二つの非現実的人間像は、はからずも、夢に特有の極端さとゆがみによって、彼らとその写実的実録を目指した人間の条件のあいまいさを浮き彫りにもするのである。

¹⁷⁾ Daniel Aaron が *Men of Good Hope* の “Introduction” で述べているとおり、ハウエルズのような19世紀のお茶の間社会主義者は20世紀のイデオロギー批評家のあいだでは極めて評判が悪い。彼の空想的社会主義を逃げと見て叩く批評の一例としては Parrington, Vernon L., Jr., *American Dreams: A Study of American Utopias* (New York: Russell & Russell, 1964), 2nd ed., originally published in 1947.

¹⁸⁾ もちろんエドワード・ベラミー『振り返ってみれば』(1887)をきっかけにしたユートピア小説ブームの影響が大きい。この間の事情については Phaelzer, Jean, *The Utopian Novel in America, 1886-1896* (Pittsburgh: Univ. of Pittsburgh Press, 1988) を参照。

Human Nature in Mark Twain's *What is Man?* and William Dean Howells's *The Traveler from Altruria*

〈Summary〉

Ichiro Takayoshi

In this essay, I read Mark Twain's *What is Man?* and William Dean Howells's *The Traveler from Altruria* in a mutually illuminating manner. The former being written in the form of a pseudo-philosophical polemic and the latter in the form of a utopian novel, they both represent generic aberrations in the literary careers of the two major realist writers who together helped launch American literary realism in the last quarter of the nineteenth century. From the 1890s onward, the two aging novelists were increasingly veering away from literary realism, upon which they had built their reputation and financial success, and this process of radicalization found its clearest expression in *What Is Man?* and *The Traveler from Altruria*.

In *What is Man?*, borrowing from social sciences and moral philosophy discourses on "human nature" then prevalent in Western cultures, Mark Twain adopts a Darwinian/utilitarian view of human beings as amoral machines that always calculate maximization of self-interest and seek the mastery over others. This crude caricature of what constitutes "human nature" is mirrored and counterbalanced by an altruistic portraiture of humankind which William Dean Howells presents in his utopian novel. Diametrically opposed to Twain's extreme pessimism is Howells's unrealistically rosy theory that cooperation and self-sacrifice are innate components of human instinct.

I suggest that these two grotesquely distorted theories on society and human nature not be taken at their face value. They are symptomatic expressions of the two novelists' deeply subjective assessment that their projects of literary realism proved a failure, this sense of disillusionment being compounded by their ever-alert social consciousness that fin-de-siecle American society, as characterized by nascent consumerism, class polarization, and rapid urbanization, required a correspondingly new form of literary realism, something that they knew they could neither reinvent nor participate in.